

都市におけるコミュニティ・ツーリズムの実践と可能性

—釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを事例として—

The Practice and Potential of Community Tourism in Urban Area: the Case of Kamagasaki Study Tour

松村 嘉久*・ありむら 潜**・平川 隆啓***

MATSUMURA Yoshihisa, ARIMURA Sen and HIRAKAWA Takaaki

大阪市あいりん地域で行われている「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」は、都市における真のコミュニティ・ツーリズムの希少な実践事例である。色々な社会問題が凝縮して溢れるなか、新たなまちづくりが胎動する釜ヶ崎は、市民社会から異質で異様で危険な空間と認識され、立ち入り難いがゆえの好奇のまなざしと、内実理解に基づかない偏見のまなざしが投げかけられてきた。このツアーでは、地域の内実と市民社会の偏見とのギャップを埋め相互理解を図るべく、コミュニティの成員が自らのコミュニティを語り、収益の一部が当事者やコミュニティへと還元されている。本稿ではその実践と可能性について報告したい。

キーワード: コミュニティ・ツーリズム (Community Tourism), スタディ・ツアー (Study Tour), 異地域理解 (Cross-areal Understanding), 大阪・釜ヶ崎 (Kamagasaki, Osaka)

1. はじめに

Community based tourism (以下, CBT) と Community tourism (以下, CT) は、日本でも海外でも、同じ概念を指す場合もあれば、微妙なニュアンスで使い分ける場合もある。個々の研究者が様々な定義を与えているため、二つの用語の関しては、観光学史の観点から、詳細な回顧と展望がなされるべき課題であろう。ここでは簡単に要点のみを整理しておきたい。

CBT の場合は、持続可能な観光が強く意識され、あるコミュニティが運営する観光資源を活用して、コミュニティの成員や全体に何らかの収益がもたらされ、コミュニティの維持や発展に寄与する、というのが理念であろう。つまるところ、コミュニティそのものの存在と役割、その一体性・自律性などが強調される。これに加えて持続可能性も強調されるため、CBT 研究は、主として、エスニック・ツーリズム (ethnic tourism) やエコツーリズム (Ecotourism) と絡み展開される傾向が顕著であり、研究対象となるのは、農村・周辺・低開発地域が中心となってきた。

一方で CT の場合、コミュニティ独自の運営やコミュニティへの利益還元という点はあまり強調されず、

コミュニティと関わるなかで観光行為が成立する点を重視して、コミュニティの文化や誇りの維持・再興を期待する、というニュアンスが強い。CT は、コミュニティや住民と来訪者との相互交流の促進という点は譲らず、理念としては based を志向しながらも、CBT から based を外すことで、そもそもコミュニティが脆弱な都市地域においても、事業展開し得る地平を拓いた。

2008 年秋に発足した大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会は、日本で最初に CT 概念を全面に打ち出した。その設立趣旨のなかで、CT は「観光客が訪れた地域の人々とふれあいながら、その地域の歴史や文化、生活を体験し学ぶという体験交流型観光」と定義されている。同協議会は「大阪あそ歩 (Osaka Asobo)」を展開し、数多の「まち歩き」と「まち遊び」を実践してきたが、単なる観光振興の文脈を超えて、草の根からの市民運動としても評価できる。しかしながら、実際の「まち歩き」では、コミュニティのなかで存立する建造物や歴史文化遺産を、テキストとして読み解き歩くのが中心である。コミュニティは彩りとして存在する程度で、コミュニティに対する働きかけは弱いのが現状である。

*阪南大学国際観光学部教授 **釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長 (漫画家)

***大阪市立大学都市研究プラザ GCOE 特別研究員

釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーは、コミュニティを見せて解説するだけでなく、コミュニティの再生やまちづくりへの働きかけを強く意識し、CBTを志向する希少な事例である。本稿では、釜ヶ崎でのスタディ・ツアーの実践を紹介し、その可能性を考察したい。

2. 釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーの特徴

(1) スタディ・ツアーの歴史と目的

釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーは、1999年に発足した「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」(以下、フォーラム)が主催している。釜ヶ崎で生活・活動する個人が集うフォーラムは、地域住民を中心としたコミュニティ再生のまちづくりを支援する目的で結成された。フォーラムは非営利事業として、結成当初から2011年10月末まで、地域住民も参加する「まちづくりひろば」を、月1ペースで通算158回も開催してきた。まちづくりひろばから生まれたアイデアが、具体化して動き出し、釜ヶ崎を変える契機となった例も多い。

フォーラム結成以来、地域事情に関する問い合わせがたびたび寄せられ、それに応えるため、実態としてスタディ・ツアーを何度も無料で実施した。その後、スタディ・ツアーの確実な需要と社会的意義がフォーラム内で認識されるようになり、2004年9月から収益事業として位置付けられ今日に至っている。

スタディ・ツアーの目的は、以下の三つである。

- 1) ホームレス問題や釜ヶ崎地域でのまちづくりについて現地訪問を受入れ、相互理解(学びあい)を深めること。
- 2) それを通じて、市民社会と釜ヶ崎地域との架け橋になること。
- 3) 単身高齢者の生きがいと小さな仕事づくりに寄与すること。

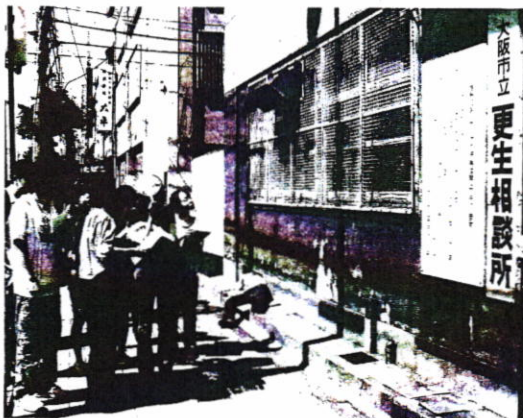


写真1 故・浅田浩ガイドによる路上での解説(2006年)

(2) スタディ・ツアーの特徴

第一の特徴は、地域で生活する当事者(日雇い・野宿・生活保護の経験者、通称おっちゃんガイド)が、地域で活動するフォーラムスタッフと一緒に歩き、地域の成り立ちや暮らしを解説する点である(写真1参照)。ツアーのなかでは、コミュニティの内側の者が内からの視点で地域の内実を、当事者経験に基づきながら語られる。おっちゃんガイドたちが、日雇いや野宿の経験を経て、現在は穏やかな市民生活を送っていることから、参加者たちは、日雇いや野宿の問題を身近に感じるようである。

おっちゃんガイドは地域のインタープリターに育つ過程で、まちづくりひろばなどに参加して、自らの地域について学ぶ。その学びを消化し客体化し、自らのなかで再定置し、外来者に向けて語るなかで、地域や自身の生活歴と向き合うきっかけを持ち、自信と誇りを回復していく。生活保護を受けているおっちゃんガイドなどには、有償ボランティアとして、1千円から2千円くらいの謝礼が支払われるが、この小さな仕事は、半就労半福祉を志す誇りの源泉にもなっている。おっちゃんガイドの多くは、野宿経験者で構成される紙芝居劇団「むすび」のメンバーと重なっている。ツアーで解説して、そのオプションで紙芝居劇を披露することもあり、それが他者とのつながりを確認する場となり、生きがいともなっている。

第二の特徴は、フォーラムで培ったネットワークを活かし、来訪者が容易に立ち入れない内なる現場を、安心して見て回れ解説も聞ける点である。現場での適正な事実の把握から、正確な知識が学習され、ガイドによる背景の解説から、その知識が理解へと昇華されてゆく。外から恐る恐る垣間見るのではなく、厳しい現実に立ち入り、しっかりと向き合うことで初めて、好き嫌いは別物として、理解が深まる。

第三の特徴は、ツアー開始前に地域についての座学でのレクチャーがあり、ツアー途中か終了後におっちゃんガイドも含めた語らいの場が設けられる点である。路上で立ち止まっての解説は、深刻な状況にある当事者からの視線が痛く突き刺さり、時にはトラブルのタネになることもある。スタディ・ツアーでの見聞があまりにもリアルで衝撃的なことが多いので、参加者が現実を受入れる態勢をレクチャーで整えて、路上での解説を短く抑え、事後の語らいの場で誤解や疑念を解消できるよう心がけられている。

第四の特徴は、スタディ・ツアーと協賛グッズ販売で得られた収入の約10%を、野宿・ホームレスを支援する地域団体（勝ちとる会・釜ヶ崎炊き出しの会・NPO釜ヶ崎支援機構）へ寄付している点である（表1参照）。2011年度からは、フォーラムの事業収入余剰金の積み立てから、地域で活躍するNPO（ココルーム・むすび）への寄付も始めた。このスタディ・ツアーでは、コミュニティの生活を来訪者が一方的に見て終わるのではなく、見られることで発生した収益の一部が、地域や当事者へ還元される仕組みができています。地域住民が参加するまちづくりひろばを積み重ね、地道な地域還元を行ってきたことで、見られる側のスタディ・ツアーへの理解も、徐々にではあるが高まりつつある。

表1 釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーの催行実績

年度	スタディ・ツアー			収入 単位(万円)	地域へ の寄付
	回数	参加者	ガイド		
2004	14	78	45	13.7	—
2005	23	238	79	36.4	9.2
2006	29	293	98	33.4	5.4
2007	37	310	97	40.1	7.4
2008	22	300	48	51.9	6.4
2009	27	250	67	48.4	5.2
2010	16	158	47	27.0	2.7
合計	168	1,627	481	250.9	36.3

3. 釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーの実践

(1) ツアー催行実績とツアー参加者の属性

2004年9月から2010年度末の間で、スタディ・ツアーは記録に残っているものだけで、実に168回も催行、ツアー参加者も1,627名に達した（表1参照）。ツアーの事業収入は積算で250.9万円、地域団体への寄付も36.3万円となった。フォーラムのスタッフの多くは現役有職者なので、ツアーは主として土日、スタッフの都合さえつければ、平日に催行することもある。ツアーの全行程は約2時間半、その内訳は、まち歩きが1時間半、レクチャーと語り合いが1時間である。レクチャーと語り合いの場としては、大阪市立大学西成プラザか、サポータティブハウス「おはな」の談話室を利用することが多い。

ツアー参加費は、2名以上で参加する場合、学生ならば1人当たり1,500円（まち歩きのみ1,000円）、一般ならば2,000円（同1,500円）である。語り合いの場で、まちづくり協賛のキャラクターグッズや学習図書（あ

りむら2003、原口ほか2011）が販売される。ツアー参加者は1名の時もあれば、30名を超える時もある。参加者が多い場合は、十数名までのグループに分けて、各々のグループにガイドが付き、互いに連携を取り合いながら、路上で大集団にならないよう配慮しながら歩く。オプションとして、紙芝居劇団むすびの上演を見学でき、より専門性の高い学びを希望する個人・団体に対しても、フォーラムスタッフが対応している。

ツアー参加者の属性は多様であるが、社会問題・福祉・医療・観光などを学ぶ学生・教員が過半を超える。その他では、行政職員、福祉・医療従事者、労働組合関係者、NPO・NGO関係者、議員、領事館職員・JICA研修生、宗教者、ジャーナリスト、一般市民などが挙げられる。外国人参加者も少なくなく、留学生も含めると、過去の実績で優に100名は超える。参加者は毎年入れ替わるが、リピート参加する大学のゼミや組織・団体も多い。

(2) スタディ・ツアーの行程と解説ポイント

スタディ・ツアーの典型的な行程は、おおよそ以下の通りで、【 】内はガイドが解説するポイントである。歩く距離にして2kmに満たないコンパクトな地域であるが、他所とは明らかに異なる濃密な社会空間が広がり、社会問題が可視化され身体性で感じ取れるコースとなっている（資料1参照）。

あいりん労働福祉センター【寄せ場・白手帳・日雇い労働者の生活・手配師・尋ね人・職業訓練・建替え問題】⇔ NPO釜ヶ崎支援機構【シェルター内部見学・特別清掃事業（公的就労）】⇔ 萩之茶屋北公園【社会的排除から新しいまちづくりへ】⇔ 四角公園【炊き出し・ホームレス支援団体】⇔ わかくさ保育園・西成市民館【子供との交流の大切さ・まちづくりひろば】⇔ サポータティブハウス「おはな」【野宿から生活保護へ・生きがいとつながりづくり・語り合いの場】⇔ 三角公園【野外テレビ・夏祭り】⇔ ふるさとの家【宗教者の支援活動・単身高齢者】⇔ こどもの里【夜回り・地域の将来とまちづくりと子供】：路上にて【酒類自動販売機・路上飲酒・コインロッカー・コインランドリー・蚤の市・監視カメラ・防犯巡回・救急車出動・行旅死亡人・野良犬・賭博・覚醒剤】

ツアーガイドの得意分野によって、解説の重みや深さは異なるが、以上がレギュラーコースである。この他に、参加者の関心に応じて、大阪市立更生相談所・今池平和寮（救護施設）・紙芝居劇団むすび・NPOコ

コルーム・旧飛田遊郭・新今宮観光インフォメーションセンターなどを回る場合もある。フォーラムのスタッフは、まちづくりひろばでの対話の積み重ねから、訪問する先々と面識もありつながっている。おっちゃんガイドは、自らの経験や現在の生活のなかから、臨機応変に現場で語り、語り合いの場で活躍する。

いずれにしても、何の解説も無く外から垣間見るだけならば、間違いなくアレルギー反応をおこして、地域やコミュニティに対する偏見を抱くコースである。コミュニティのなかでツアーガイドの臨地解説に耳を傾け、正確な事実を把握して、その背景を理解しなければ、この地域の地域像は決して描けない。これこそがCTであり、スタディ・ツアーの存在意義である。

ツアー参加者から系統立てて感想を聞いたり、アンケートしたことはなく、スタディ・ツアーの学びあいの効果についての検証はできない。しかしながら、「ドキドキしながら歩き」「衝撃を受け」「目の光景に戸惑い」、時に「怖い」と感じることもあるが、フォーラムスタッフの解説を聞き、おっちゃんガイドと語り合うなかで、参加者の多くが理解し始めることは確実であろう。特に、むすびの紙芝居劇を見た参加者は、人と人のつながりの大切さを痛感するようである。

4. おわりにかえて：都市におけるCTの可能性

東日本大震災や福島原発事故で想像を絶する被害を受けたまちがある。その現場にいる人たちは、何を考え、どう思っているのだろうか。外からでも声をかけたいが、かけていいものかどうか迷う。現場にいる人たちのなかには、外に向かって語りたいが、その機会を持っていない者が必ずいるはずである。

決して物見遊山ではなく、その現場へ行くことで、自分のなかの何かが変わることを期待し、加えて、その行為がまちの復興の一助にでもなれば…と望む人は、日本のみならず、世界各地に間違いなく存在する。被災地のコミュニティのなかから、自らのコミュニティの成員と上記のような外部者たちをつなぎ、コミュニティへ収益を還元する仕組みを生みだせれば、見る側も見られる側も明日への一歩が踏み出せ、その営為をコミュニティが穏やかに見守れるようなCTが成り立つのではなかろうか。

釜ヶ崎でのスタディ・ツアーの実践は、その可能性を示していて、観光学の実践が震災復興に貢献し得る道筋を照らしているように思えてならない。

謝辞：スタディ・ツアーの催行にあたっては、紙芝居劇団「むすび」の婦木広文さん（2009年没・享年74歳）、同団代表の浅田浩さん（2011年没・享年83歳）にとってもお世話になった。感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。スタディ・ツアーは、現役のおっちゃんガイドや釜ヶ崎の地域住民によって支えられている。改めて感謝をささげたい。



資料1 スタディ・ツアーで配布される「センター周辺案内」

【参考文献・ウェブサイト】

- 1) ありむら潜 (2003) : カマヤんの野塾—漫画ホームレス問題入門—, かもがわ出版, pp.169.
- 2) 大阪あそび : <http://www.osaka-asobo.jp/>.
- 3) 小林英俊・緒川弘孝・山村高淑・石森秀三編 (2010) : コミュニティ・ベースド・ツーリズム研究, 日本交通公社, pp.235.
- 4) 原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓編 (2011) : 釜ヶ崎のススメ, 洛北出版, pp.400.
- 5) 茶谷幸治 (2008) : まち歩きが観光を変える, 学芸出版社, pp.191.
- 6) 松村嘉久・丸市将平 (2010) 外国人向け地型まち歩きツアーの理論と実践, 日本観光研究学会全国大会第25回全国大会論文集, pp.97-100.